

Ⅳ まとめ

福井県における地球温暖化の影響を把握するため、県内における地球温暖化に関連する各種データを解析した。

その結果、本県でも様々な分野において、地球温暖化が要因の一つと考えられる現象が顕在化していることが明らかとなった。

【気候】

- 福井、敦賀の年平均気温は、100年あたり、それぞれ1.47℃、1.53℃上昇している。
- 年平均気温の過去30年間の変化では、福井、敦賀およびアメダス6地点において、0.79～1.47℃上昇しており、広域的な気温上昇が見られる。
- 福井、敦賀における猛暑日・熱帯夜の日数は平成になって増加し、冬日の日数は減少している。
- 冬季（12月～2月）の平均気温・最低気温の上昇によって、福井、敦賀の降雪量が平成になって著しく減少している。
- 福井の年間降水量は減少傾向にあるが、敦賀では変化傾向は認められない。
- 福井、敦賀およびアメダス7地点（計9地点）における時間最大降水量20mm以上の年間日数は2001年から増加傾向にある。日降水量50mm以上の年間日数では、過去30年間で変化傾向は認められない。
- 福井、敦賀の年平均湿度は、100年あたり、それぞれ9.0%、7.8%減少しており、その要因の一つとして気温の上昇が考えられる。

【生物季節活動】

- 福井の「さくら（ソメイヨシノ）」の開花が、3月の気温上昇により、50年間で5.4日早くなっている。
- 福井の「ススキ」の開花が、7月・8月の気温上昇により、30年間で15.5日遅くなっている。
- 福井の「イロハカエデ」の紅葉、「イチョウ」の黄葉が、秋季（9月～11月）の気温上昇により、30年間でそれぞれ24.1日、24.2日遅くなっている。
- 福井の「アブラゼミ」の初鳴きが、50年間で11.8日早くなっている。

【水環境】

- 若狭町神子地先（毎日測定）の海水温は30年間で約1.3℃上昇している。玉川川地先、海中公園の年6回の海水温の測定結果では変化傾向は認められない。
- 九頭流ダムおよび北潟湖（湖心・南部）、水月湖、三方湖の年6回の水温測定結果からは、閉鎖水域における水温の変化傾向は認められない。
- 九頭竜川荒鹿橋、大納川末端の6月、12月の毎月1回の水温測定結果からは、河川における水温の変化傾向は認められない。
- 北潟湖（湖心・南部）、水月湖、三方湖の年6回の水質測定結果からは、閉鎖水域における水質（COD）の変化傾向は認められない。

IV まとめ

【農業・漁業】

- 「コシヒカリ」の出穂期が1990年代以降、気温の上昇によって早くなり、1等米比率の低下につながっている。
- 「福井梅」は、6月上中旬の高温・乾燥によって、樹脂障害果（ヤニ果）が発生しやすくなっている。
- 「ミディトマト」は、高温（35℃以上）が続くことによって軟化果が発生するなど、気温上昇による品質への影響が懸念される。
- 「大麦」は、気温上昇によって、穂数過剰につながるとともに生育が早まる傾向が見られる。
- 「さわら類」の漁獲量が1999年以降急増しており、その要因の一つとして海水温の上昇が考えられる。

【健康】

- 熱中症による救急搬送者数は、日最高気温が高くなるに従って多くなり、32℃以上で急増する。また、暑さの厳しい年には、救急搬送者に占める高齢者の割合が高くなる。
- 日本紅斑熱の病原体などをヒトに媒介するマダニ類の分布相については、1991年と2011年との比較においては、温暖化の影響は確認されていない。
- 福井局、神明局、敦賀局の光化学オキシダント濃度に上昇傾向が認められる。濃度上昇の要因として大陸からの越境汚染の影響も指摘されているが、温暖化の進行によって濃度がさらに上昇する可能性がある。

【自然災害等】

- 雪害については、「年間被害額」は平成の期間（1989～2010年、以下同じ）が昭和の期間（1975～1988年、以下同じ）よりも大幅に減少している。また、「雪害発生率」、「人的被害数」、「住宅被害件数」も、平成の期間が昭和の期間よりも減少している。
- 風水害については、「風水害発生件数」、「人的被害数」、「住宅被害件数」とも、平成の期間が昭和の期間よりも増加している。
- 標高の低いスキー場ほど雪不足の影響を受けやすく、地球温暖化によって暖冬化が進行すると、営業日数がさらに減少する可能性がある。